

The Explanation on 'Kishiroku' (1849)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9625

『起止録』解説 (嘉永二年)

江森 一郎

The Explanation on 'Kishiroku' (1849)

Ichiro EMORI

一 既発表分と今後の予定

既発表分など

この解説は、昨年三月三十一日発行『金沢大学文化財学研究九』所載の『起止録』解説^一及び『起止録』安政二年(一八五五)と基本的に同じ形式で『起止録』の嘉永二年(一八四九)の分を解説・翻刻している。『起止録』そのものの史料の意義や概要については、そちらを参照願いたい。特にそこに付載した「登場人物一覧」は不十分なものではあるが、この嘉永二年分の人物についても、そちらにもある人物については『金沢大学文化財学研究九』所載のものの参照を求めている。この解説に付載する「登場人物一覧」(嘉永二年)は、あくまでも『金沢大学文化財学研究九』には載っていない人物だけを載せている。紙幅の関係上そのような形をとったことを、あらかじめご了承ください。

嘉永二(一八四九)年の時代相とこの解説の概要

アヘン戦争の勃発(一八四〇)と清朝の大敗は、幕府の対外政策に大きな影響を与えた。嘉永二年(一八四九)閏四月には英国

艦船の江戸湾侵入があり、老中は昌平校に臨み、海防策の献策を求めた。この頃になると海岸線の長い加賀藩領海岸にも異国船がしばしば姿をみせるようになり、加賀藩でも海防策を講じるようになり、藩士の献策もあった。『加賀藩史料藩末篇上』嘉永二年閏四月の項参照。他方、『起止録』には、この年の閏四月朔日に「海防策一篇草稿成」(傍点引用者)という記述がある。残念ながら内容が不明であるが、このような「草稿」を書いたこと自体が、この頃の豫卿も知識人として時代の流れに敏感であった証拠と言える。また、中村豫卿にとってもこの年は(豫卿二十七歳)人生の大転換期であった事は、翻刻文を通読していただければよく分かる。前々年の弘化四年(一八四七)一二月の母の死去とその後の自身の結婚(後述)、この年の父の死去(五月一七日)、服忌(五十日間)、転居、九月六日の従兄弟井口三次郎の死、翌年十月二日の跡目相続という身辺生活にかかわる重大事項が次々と生じた。嘉永三年の跡目相続を境に豫卿の生活環境、交友範囲も孝友堂の学友や後輩との付き合いや学習、教授中心の生活から、職場の同僚との仕事や交流中心の生活に転換してゆく。このようにみえてくると嘉永二年の年は教育者としての豫卿の最後の年といえる年である。したがって、こ

の解説では今の時点で解明できた豫卿の教育活動を中心に述べてみる事とした。しかし、多数登場する弟子や同輩との儒学学習を精査してゆくと、今の我々には想像が難しい学習と遊芸の混淆が気になる。これらの混在をどう解釈すべきか（藩士が遊芸に流れたと言われる加賀藩独自の問題なのか、江戸時代の諸藩に通じるものなのか）未だ総合的に解釈しきれない部分が多い。この解説は残念ながら未だ起止録による江戸時代教育文化史解明の一過程に過ぎない。

西坂成庵と孝友堂

孝友堂の塾主・西坂成庵については、昭和前期、森潤三郎の詳細な研究がある。「金澤藩儒臣 西坂成庵伝の調査」（一）（二）及び同補遺の四論文である。（いずれも『東洋文化』百四十九号など所載）また、郷土史家・太田南圃の「西坂成庵の性行と学説」「郷土史叢」第二冊、加越能史談会）もある。ともかく塾主西坂成庵は、江戸の昌平校で多くの師友から囑望された秀才であったことが、これらの五論文から分かる。

加賀藩の明倫堂では、創立以来「助教」が教官の中心を担ったが、その任命条件として、江戸の昌平校における三年前後の修学とそこで舎長などの役職を経験することが、暗黙の条件になっていたようである。「御細工人」という身分の低い家柄出身だった西坂成庵は、この条件に適合していたから、多少の出世の遅れはあったが、助教になりえたと思われる。（水上一久「加賀藩の昌平校入学者」『北陸史学』第九号、一九六〇、ロバート・フラッシュャム、ヨシコ・フラッシュャム「昌平校に遊学した加賀藩及び支藩の人々」『地方史研究』三四巻六号、一九八四などを参照）

成庵やその子孫の加賀藩幕末史に与えた影響については、別に究明されるべき課題であるが、ここでは、弟子・永山平太（後出）の「西坂先生行状補遺」が紹介され（前掲「補遺」論文三十一―三

一頁）、その中で「平生以薦達人材為己任、雖寒門卑賤之徒、苟有材芸者、必……」とあることに注目したい。西坂は、塾生身分の尊卑にかかわらず広い人材を教育したのである。

天保九年（一八三八）三月下旬、豫卿が西坂成庵に十九歳で入門した際は、「小学題辞」の質問からであった。その後八月八日より毎月三日と八日の昼に孟子の会読も指導を受けた。先生が「弁解」し、疑問点があれば外の参加者に問う形で進行了。十月十一日には小学を終え、「（孔子）家語」を始めた。この習得の途中で豫卿は「学制修補」（後述）直前の明倫堂生徒としての入学を許可された。その際、西坂先生の指導で家語を後にして論語を先に学習するように言われ、十一月三日から三日と八日の昼に孟子の会読後に、後の親友丹羽など七、八名で論語会読を行った。その後、明倫堂の試業に合わせ、論語の弁書も行っている。（以上、豫卿『覚書』巻第一による。）なお、これらはすべて送り仮名返り点つきの和刻本で行っているらしい。

ともあれ、以上が豫卿の西坂塾入門期の習得状況であるが、すでに素読の段階を終了してから入門したことが分かる。天保十三年（一八四二）七月十八日から、門生が百人前後に増えたので塾の組織的運営方法を決め、上級生を甲席、中級生を乙席、素読段階の下級生を丙席と三つのグループに分類した。豫卿たち数名の上級生が「読長」の中級生（四五名）を指導し、読長がさらに素読生（下級生四十名）の素読を指導する体制とした。上級生も読長（中級生）も教えられながら教える、一種の助教法がとられていた。

ここに翻刻した嘉永二年の頃の西坂塾・孝友堂の様子を『起止録』から窺ってみると、この年の稽古始めは、一月二十五日であり、午後には謡の会を行っている。また、周易の会読を十一、二十一日の日にやっている。この会読には先生（西坂成庵）が参加し、構成員が順番に「弁解」を行っている。この年の初回の二月十一

日の午前には豫卿が弁解を行っている。この準備には「下読み」の後丹羽の所にゆき討論し、さらに「五つ前に起き」下読みをした上で臨んでいる。周到な準備が必要な本格的学習の場であったことが想像できる。同二十一日には永山熊之助、三月十一日には「林清」である。同二十一日には富山方面に本人が旅行中で記述がない。四月十一日には大嶋勉之助、二十一日は先生が「不快」のため休会。二六日は加藤平太郎が「弁解」、閏四月十一日は丹羽、同二十一日は高村である。その後、父の容体悪化で豫卿の欠席が続いた。九月二十一日からまた参加したらしく、この時は豫卿が「弁解」している。

十月一日は開かれたようだが、弁解者は書かれていない。同十一日は「永熊」、二十一日は「林清」、十一月五日も開かれたが従弟の中村小太郎と大嶋稼亭が二人で弁解している。同十一日は先生が自ら講釈(文言伝)し、二十一日にも先生が文言伝二節を講釈している。十二月に入ると(周)易の会説はなくなった。嘉永三年に入っても再開された記録はない。これらで弁解を担当しているのは孝友堂の高弟たちであることは言うまでもない。なお、この高弟たちによる易の会説は、嘉永元年五月一日午前の西坂成庵の「周易繫辞伝首一節先生講釈」から始まったとみられる。

豫卿は毎年孝友堂の開講式には必ず出席し、嘉永二年の記述だけでは推測しにくい、その他の年の記述から、その実質的運営の中心的存在だったらしい。

また、日常の運営でも中心メンバーの一人として、中級、下級の塾生の助訓、助読を分担していたらしい。この分担の詳細は分からないが、この年の豫卿の担当は九のつく日だったことが分かる。もちろん、他の高弟と担当日を都合で入れ換える事もあったらしい。指導担当の日は八時前後に起床し、昼頃に終わる。つまり午前中の半日を充てている。助訓、助読の指導を受ける塾生数

は七、八人から十数人だが、それより多い時も少ない(二人)時もある。先生が「不快」の翌日(四月二十二日)は「助読三十人斗」(「助訓十四、五人」、合計四十四、五人もの指導をしている。要するに、学習者の都合で日々教える人数は大きく変化するのである。

先にも触れたが、孝友堂では武士身分の内部ではあるが、身分を越えた儒学学習の切磋琢磨が行われていたと思われる。(江森一郎、竹松幸香「加賀藩与力、中村豫卿の学習・教育環境と文化サークル」、『金沢大学教育学部紀要(人文・社会科学編)』第四六号、平成九年、参照)しかし、そのさらに詳細で全体的な究明は、我々自身の今後の大きな課題である。

二 嘉永二年前後の中村豫卿の境遇

外出差し止め

弘化三年(一八四六)三月二七日から一年余り、豫卿は「外出差し止」の処分を受けた。その詳細な経緯は江森一郎、竹松幸香「加賀藩与力、中村豫卿『起止録』について」(九二―九三頁、『市史かなざわ』第三号 一九九七、竹松執筆部分)で説明している。要するに、豫卿の方では事前に手続きをして問題化しないよう対処したが、それが上部に十分伝達されず、「不屈」であると処分されたのである。藩主の行事の無断欠席で一年間以上(弘化四年五月一日まで)の自宅謹慎(訪問者の訪問は許される)の処分を受けるという事は、藩主に対する忠誠心にかかわる問題は、厳罰主義で臨まれていたことを示していると言えよう。しかし、この期間は豫卿が読書に励んだ期間ともなり、この時期の読書傾向の考察は、一つの事例研究として意味があると思われる。なお、この謹慎処置の解除前後に入門者が多く、嘉永二年の記事に頻繁に登場する森嶋十太郎(森十)の入門は四月二七日、山本元太郎

（山元）の入門は、五月十二日である。

結婚

豫卿の結婚は『起止録』の上ではなかなか分かりづらい。しかし、よく読んでみると、弘化四年一月一六日に「夕八時（午後二時前後）に婚礼客来、夜八時（午前二時前後）に仕舞」と簡単にあるのが、豫卿自身の婚礼の事と解される。三日後の一九日に弟子の豊虎が祝儀に来る記事があるのもその傍証であろう。翌嘉永元年正月三日の記事から（「向かいの家」の生山娘三人来）などとそれまでの日記の正月にはない華やかな雰囲気がある。これは豫卿の妻が家族に加わった結果と考えられる。

なお、嘉永二年四月一九日に「六つ半に起飯炊き掃除等、是日じちゅう（寺中）御神事能見物に妻下女共に行き・・・夜皆帰る」とあるのが、妻の語の初出と思われる。同年六月にも「七日・・・夜味噌蔵丁奥様去、寝・・・八日 五ツ半二起、晩ニ妻帰」ともある。その他には、妻の語は殆ど登場しない。

父の死去、葬儀、服忌

この年の四月二八日に「是夜五つ時より父風邪既に難儀、夜兩三度起き扶持（引用者注、助け導く意味）」とある。翌日には午前中は看病し医師・井上見龍の往診がある。午後には別の（金沢で名医の評判の高かった）医師・森元俊その他、渡辺元隆、江間幸斎の往診も頼んだ。五月八日には「役所見合わせ紙面」を用意した。この頃は「夜仮寝屢々起」など看病関連の記述が続くが、素読指導や謡の稽古も行っている。一五日には、当時から著名だった蘭法医・黒川良庵の往診も友人を通して依頼し、来てもらっている。評判の医師をできるだけ多く呼んだように見える。又、親戚（「井三」）や近所の弟子（「遠長」）に白山への「代参」を頼ん

でいる。しかし、同月一七日には父は死去してしまい、「大切案内紙面」を親戚友人と用意し、葬式準備に入る。近世では医学の発達が遅れていたから、他の例でも多くの医師の関与に拘わらず、簡単に死んでしまう気がする。ともあれ、二一日には葬列を調べ遺体を菩提寺の本光寺に葬る。同時に「中陰繰り上げ法事」を済ませ、二日からは連日菩提寺の本光寺へ参詣する。二三日には百二十五匁を本光寺に収める。現代に換算すると約五〇万円という高額のお布施である。六月二三日に傷が膿んで歩行困難となるまで毎日参詣する。なお、豫卿の「服忌」については、すでに林 由紀子「金沢藩の服忌制度」『近世服忌令の研究』（清文堂、一九九八）四百九～四百十頁においてかなり詳細に考察されている。

林氏の分析は以下の通りである。

一 ほとんど毎日のように亡父が葬られた本光寺に参詣している。途中傷が悪化したときは「代参」を頼んでいる。二 精進もきちんと守っている。三 月代を忌中の間（五十日間）剃っていないなど藩の作法通り（あるいはそれ以上に）「慎みを守って過ごした」とされている。我々は、当面の忌中の行動を林氏以上に深めることは出来なかった。なお、加賀藩の武家の葬儀には莫大な費用がかかったこと、法事を何回も行うことなどが、磯田道史『武士の家計簿』（新潮新書、二〇〇三年）で算用者、猪山家の事例で明らかにされている。同じ加賀藩の事であり、多額な葬儀費用など共通点が多いようである。

転居

七月九日の父の忌み明けの翌日には「転宅案内紙面百通余り」に従弟、親友、弟子たちに用意してもらう。忌み明け直後の転居は、かねてから計画されていたことを示している。

七月八日父の忌み明けの日が来て、直ちに寺社奉行で与力裁許を

兼帯していた前田内蔵助邸に「雇い駕籠」に乗り、父の遺書を届けた。十日には友人、弟子の協力で「転宅案内紙面」を百通余書いてもらい一二日には雇い人に荷物を（恐らく荷車で）引かせて味噌蔵町に引越した。二日間にわたり十一回往復したことになる。空き家になった居宅は「銀子老貫目」（大まかに銀一匁四千円で換算すると四百万円。）で、従弟の中村小太郎立ち会いのもとで隣家の斉藤判大夫に売り払っている。加賀藩では、与力の当主がなくなつた場合、嫡子は家督相続が認められるまで居屋敷に止まる事を許されていた『諸支配方取捌留』金沢市立図書館、近世資料館蔵）が、豫卿の場合、居屋敷を引き払っている。引越した先は今のところはっきりしないが、百八十石の寺西七兵衛家の隣の旧任田源蔵の土地を借りたものと推定される。

なお、この年の四月四日には、親友の大嶋（稼亭）に「貸屋の相談」に行っている。閏四月一八日には「大嶋江行、任田江家見二行、又大嶋二而暫咄」とあるので、この件では親友の大嶋に世話になっているようである。

加賀藩武士の拝領居屋敷の貸借・売買の実態については、先行研究を知りえないでいるが、豫卿の祖父の記録『加賀藩士 中村養昌一代記』（中村夏栄編集者代表、私家版、一九九七）によれば、明和五年（一七六八）三月一日の記事に拝領居屋敷を馬廻組中村三郎兵衛へ「十か年季にて相對をもつて貸す、居宅は払い置く、後に同組林津衛門求むる」という記述があり、その少し先の記述に「当時小立野馬坂の高集福寺町伴左太夫むかい町家住す」とある。また、文化八年（一八一二）『金沢町名帳』（金沢市立玉川図書館）でも、例示は省略するが、多くの与力が町家に住んでいる事が分かる。父母を相次いでなくし、扶養する係累もいなかった豫卿夫婦は、味噌蔵町下土橋向の土地を借りて新築したらしい。中村家には、「味噌蔵丁下土橋の向にて建築の図」が今も残っている。

表1 嘉永2年（1849）起止録年表（註 人名は略称のままとした。）

月日	記事	背景
1/1	年賀31軒廻。	
1/2	年賀人応対、謡初。	城中、謡初
1/3	従弟・圀齊へ行き、孝友堂高弟集まり、笛吹初、5、6曲合奏	
1/4	西坂（成庵、善蔵？）へ行き、謡初を聴聞する。	
1/5	昼後より早川へ寄り、碁を観戦する。	
1/6	御触留調等、双六（すごろく）貳番、早川へ一寸行帰、年賀人応対。	
1/7	年賀帳調理、客応対など、昼後より近隣の年賀に25軒行く。	
1/8	篠井へ行き、歌かるた数十篇する。	
1/9	14時頃から坂坂二郎大夫へ行き謡をする。	
1/10	17時より高村へ行き、孝友堂学友集まり咄、大小囃子をする。	当春参勤途中の行装簡素化を命ず
1/11	年賀残八軒廻る。その後直に山崎岩丞へ御加増祝儀にゆく。	
1/12	四ツ時より孝友堂へゆき、帳面調理する。	
1/13	従兄弟、圀齋方へ行、歌かるた等をする	
1/14	山崎稽古始二行き、一篇打太刀をする。	
1/15	15時頃隣家の早川へ行き、水野大作と碁2番、山元と碁1番	
1/17	自宅にて謡会	
1/18	坂井の稽古始に行く	
1/21	林清へゆき、礼記会稽古始、15葉、その後碁2番する。	
1/24	原田稽古始二ゆく。	
1/25	8時前より孝友堂稽古始二ゆく。	
1/27	白山参詣	
1/29	孝友堂へゆき、ヒモロキ配当する。	
1/30		盗賊改奉行、部下の不正（賄賂）などを戒める。
2/1	林清へゆき、礼記会48葉。	日蝕
2/2	孝友堂へゆき、助訓5、6人	
2/3	日本史書写をはじめる。	
2/4	南清五郎が来、入門、一緒に孝友堂へゆき、助訓3人、四ツ半に帰る。	明倫堂訓導等『筆囃』一冊を献納
2/7	8時より孝友堂へゆき、助訓5、6人、助読6、7人、昼帰。	

2/9	晩より山本銀之助へゆき、近隣会、小謡等	
2/10	森守論語釈読1章はじめる。	
2/13	中村平太郎入門、小学序を素読	
2/18		明倫堂で釈菜の礼を行う。
2/20	5ツ過ニ起、授業出座帳調理など	
2/21	孝友堂へゆき、周易会5節	
2/22		藩主、英国船から送還の越中の農民の記録作成を命ず。
2/23	四ツ時より孝友堂へゆき、助訓一人、九ツ前に坂井江出座	
2/25	井佐誘、牛坂へ風箏揚げゆき、17時頃に帰る。	藩主、異国船来着の際の心得を関係諸子に諭す。
2/27	四ツ前より孝友堂へゆき、助訓2人、近思録会読	
2/28	佐藤誘遊行、途ニ本光寺墓参	能美郡沢村金山の藩営をやめる。
3/1	四ツ半より春日社望湖樓へゆき、詩文会	
3/2	大工庄右衛門へゆき、大工小助、連而馬場豊田江家見にゆく。	
3/3	寺州屋へ生花買にゆき帰、山元来、桜一杯いけ、余桃一杯いけ上る。	
3/7	坂井連日稽古始なので、朝場へ参加、木工馬を一鞍	
3/8	孝友堂へ一寸行、助訓一人、坂井へゆき、木工馬一鞍	
3/9	河内山主馬へゆき、関原軍記の講談があり聴く。	
3/10	半日詩点作(添削)、山本誘に来、口源院へゆき、椎亭、列松、圮斎、山余が集まり遊、笛式三曲吹いた。	
3/11	孝友堂へゆき、周易会	
3/13	兼山秘策20葉ばかり読合す。	
3/15	家来の源太を連れて岸太を誘い、富山方面旅行に出発	
3/16	瑞龍寺見学	
3/17	高岡の引山見物、馳走してもらい、神輿行列もみる。	藩主・斉泰、外国漂流の農民を呼び、状況を聴取。
3/18	高岡を出、小杉へゆく。	
3/19	日石寺見学	
3/20	放生津見学	
3/21	高岡関宮到着	
3/22	16時に富山方面旅行から帰宅	
3/23		斉泰参勤に上京
3/24	半日古詩を添削	
3/27	孝友堂へゆき、助読5、6人、助訓3人	
3/29	孝友堂へゆき、助訓5、6人	
4/1	観音院へ能見物二行く。	
4/2	観音院へ能見物二行く。	
4/6	生佐と集福寺(与力町)へゆき、軍談を聴く。	
4/7	夜また集福寺へ。	
4/8	昼後隣家早川へゆき、孝感伝の咄、聴聞人多し。	
4/9	孝友堂へゆき、助読一人、助訓4、5人	
4/11	孝友堂へゆき、周易会	
4/12	孝友堂へゆき、助訓1人、近思録致知篇	
4/16	山元と観音院の佐々木泉溪の画会をみにゆく。	
4/19	妻、寺中御神事能にゆく。	
4/20	孝友堂へゆき、助訓3、4人	小川群五郎等に江戸で砲術を学ばせる。
4/21	林清で礼記会	
4/22	孝友堂へゆき、助読30人ほど、助訓14、5人	
4/24	孝友堂へゆき、助読、助訓12人	
4/28	夜18時過に丹羽へゆき、詩会。毛鈞5律一首をつくる。	
4/29	礼会	
閏4.1	孝友堂へゆき、詩文会、海防策一篇草稿成る。	
閏4/4	大嶋へ一寸ゆく(貸家之相談に付)。	世子・慶寧、江戸から帰国の途につく。
閏4/7	7ツ時より金子へゆき、馬場へ出る、1匹3場	
閏4/8	八ツ半より本光寺へ、墓参する。	
閏4/11	孝友堂へゆき、周易会読	この頃江戸で種痘広まる(武江年表)
閏4/14	孝友堂へゆき、助訓一人、助読一人	

閏4/15	生佐、遠長、山元、森守、三輪良次郎連れて波吉講能見物に行く。	大聖寺川洪水
閏4/18	大嶋へゆき、任田へ家見に行き、又大嶋にて暫咄す。	
閏4/19	5ツ半より孝友堂へゆき、助訓6、7人	
閏4/20	晩より圀斎、稼亭、権亭来、詩会、各1首	
閏4/21	孝友堂へゆき、周易会	
閏4/22	学友「林清」と野町大蓮寺門前にて前田家嫡子・慶寧の御帰城御行列を拝む。	世子慶寧金沢に到着
閏4/24	「王荊公論」執筆	
閏4/26	河内山隼人誘い、春日神社へゆき曲馬5幕を見物	
閏4/28	この夜8時過より父風邪	
5/2	王安石（荊公）論執筆継続中	この頃、石川郡7か村で騒動（一揆）
5/4	父役所見合紙面調	
5/14	見舞人応対など	
5/15	父、この日まで痰咳止まらず。	斉泰、儒学にもとづく外国人待遇方法を儒者に諮問
5/16	父の回復祈願のため白山代参を2人に頼む。	
5/17	父落命、大切案内	
5/18	伊藤主馬殿被見、遺書封しめて御渡する。	
5/20	父の葬礼用意	
5/21	出棺、読経、通夜、料理51人前を出す。	
5/22	通夜四人	
5/23	本光寺へ参詣、百式拾5匁を持参する。	
5/27	浅野川出水のため大橋から本光寺へゆく。	
5/31	自宅から本光寺へ材木町、又五郎小路まわりで4千足と歩数数える。	
6/2	不快で葛根湯、大黃加皮を服す。暫く帳面調理等、この夕は本光寺へ叔父が代参する。	
6/7	叔父、本光寺代参	
6/9	自らの墓参再開	
6/20	35日速夜の法事	
6/23	此日から傷が悪くなり、歩行が難しくなる。	
6/27	この日より「寝所」にて客を応対	
7/5	四十九日速夜	
7/7		大聖寺藩主前田備後守死去
7/8	夜精進あけ	
7/9	忌み明け、前田内蔵助殿へ遺書を持参する。	
7/10	この日より食欲少し回復。「転宅案内紙面」を百通余調べてもらう。	幕府、松前藩、五島藩に築城を命ず。
7/13	22軒忌明け挨拶等にゆく。	
7/14	傷が回復する。	
7/21	銀子5百目借りに行く。	
7/24	10時過より前田内蔵助殿へ出て、由緒帳について尋ねられる。	
7/26	この日『浅草霊験記』全8冊読了	
7/29	丹羽が来、臥して甲子待	慶寧、犀川で御歩の水練をみる。
8/1	屋から大嶋稼亭など学友4人誘い、大乘寺まで遊ぶ。	
8/3	朝9時頃から葬儀来訪者に返礼にゆく（17軒）	
8/6	終日軍笥整理など	
8/7	孝友堂へゆき、助訓2人、オランダ製受陽器（エレキテル）をみる。	
8/8	越中屋六左衛門へゆき、百目手形をかき、正銀百目を受取る。	
8/9	孝友堂へゆき、助読3人、助訓15人	
8/15	大樽茶屋へゆき、月見、酒を飲む。	
8/19	孝友堂へゆき、助訓・助読数十人、四ツ半過二帰る。	
8/20	14時過より佐列松が来、尋いで西好文園、晩ニ岸井静斎来て、咄、画寄合書詩歌等をした。	
8/21	「異国船書付」を書く。	備前守卒去につき鳴物遠慮（成瀬日記）
8/26	百ヶ日法事のため来客用意など	斎泰の子、利義、大聖寺藩世嗣となることを幕府に許される。
8/27	明石源太郎が来て、蒙求学習を始める。	
8/29	孝友堂へゆき、助訓3人	

9/1	14時過より好文園、稼亭、列松と望湖楼へゆき、岸井静斎画会を見物	
9/3	久保市へゆく。	
9/4	従兄弟・井口三次郎大病に付見舞にゆく。	慶寧、学校に臨む作法を簡素化
9/5	終日看病	
9/6	母方従弟の井口三次郎病死	幕府、各藩に沿岸海深の測量を報告させる。
9/8	葬礼の世話をし、蓮花寺へ参詣	
9/9	昼後佐藤列松を誘い、柳橋へ遊行する。圀斎、西坂、白溪は、大櫓で待っていた、詩を練る等、夜月を踏み帰る。	
9/10	丹羽に男児誕生祝にゆく。	
9/11	井口へゆき、中陰逮夜をする。	
9/14	河内山隼人へゆき、孟子会読をはじめる。	
9/19	午前10時頃から孝友堂へゆき、助訓7人、昼前に帰る。	
9/21	10時から孝友堂へゆき、周易会、弁解易之興其於中古乎	
9/22	8時すぎから列松へゆき、詩会	
9/25	好文園、白溪、稼亭、圀斎、惟亭皆集まり、辰卯の感応寺へ行った。	
9/27	惟溪、圀橋が来て、詩会、各一首つくる。	
9/29	雲龍寺河内山葬礼に参詣、孝友堂へゆき、助訓九人、昼に帰る。	
10/1	朝10時から孝友堂へゆき、周易会	
10/6	14時から列松を誘って本屋敷軒廻り晩に帰る。	
10/9	孝友堂へゆき、助訓十人、昼後帰る。	
10/11	14時過から孝友堂へゆき、周易会	慶寧、白山宮に参詣
10/14	孝友堂へゆき、周易会	
10/16	孝友堂へゆき咄、助訓・助訓、四ツ前に帰る。	
10/21	孝友堂へゆき、周易会、林清が弁解	
10/22	歌会があり、詩5律一首を作った。	
10/25	一日詩作、2種つくった。	
11/5	孝友堂へゆき、周易会	
11/7	終日又三十詩別帳清書一冊	
11/10	一日詩集を読む	
11/11	孝友堂へゆき、周易会文言伝、先生がはじめの3節を講じた。	
11/15	終日歴史綱鑑抜萃を読む。	
11/19	孝友堂へゆき、助訓数人	
11/20	終日文章を練った。	
11/23	朝半日書籍入替える、「大江広元論」一篇書き始める。	
11/26	忌明挨拶にゆく。	
11/27	忌明挨拶にゆく、夜は大嶋稼亭が来て詩会	
11/29	四ツ時より孝友堂へゆき、助訓四人	
12/1	関敏、西成が来て、孟子会講を始める。	この頃降雪多し(成瀬日記)
12/2	孝友堂へゆき、孟子匯参会講をした。	
12/3	昼前より半日頼母子等調理、算術をする。	
12/6	高里、白溪が来て、孟子会講7葉	
12/9	孝友堂へゆき、助訓2人	
12/10	昼後白溪、高里が来て、孟子講、十葉済ませた。	
12/11	孝友堂へゆき、孟子講十葉、梁惠王上篇全て済む。	
12/12	孝友堂へゆき、助訓、助読	
12/13	孝友堂へゆき、助読	
12/15	孝友堂で孟子講義17葉読。6時より先生の論語講解中二眠り、7時前より素読、終日助読、昼後15時過に終わり、その後に宴会	
12/17	餅つきの手返しなど	
12/18	素読生が一人小学素読を卒業した。昼後豊虎がきて算術	
12/19	白溪、高里来、孟子講12葉読む。	
12/20	孝友堂へゆき、孟子読9葉梁惠王下篇全く済む。	
12/23	尾張町へ買い物に行った。	
12/24	夜稼亭へゆき、詩会席上5律一首をつくり、夜中3時頃帰った。	
12/25	昼後入浴に行き、また友田彦助へゆき詩2首造り、夜10時前に帰る。	幕府、異国船打払令復活を予告し、沿岸防備を諸大名に命ずる。
12/28	親友、丹羽惟溪が助教加人となり、その知らせの紙面道割などを取持った。	
12/30	5ツ時より町廻り、孝友堂へ「歳末」に行く。	

安政二年(一八五五)の起止録でも、永井平右衛門(六月二十五日)、辻(同月二十八日)が他家の「家作」を買ひ転宅した事が記されている。『金沢大学文化財学研究』9、六十頁参照)加賀藩与力たちは、拝領屋敷の地にばかり住んでいたわけではないことは明らかである。

三 嘉永二年前後加賀藩儒学学習の一断面……豫卿の漢学学習の弟子たち

概要

豫卿は、西坂塾・孝友堂のリーダー的存在であり、孝友堂での指導も継続的に行っていたが、「通い」や自宅での指導も盛んに行っている。儒学学習は大体、「一、素読(そよみ、そどく)」、「二、講義」、「三、輪講や会読」の三段階で指導されるが、豫卿はこの一、二、三のすべての段階を、孝友堂でも指導したが、個人指導もしていた。以下では、その個人指導の実態を探ってみたい。また、儒学学習が武士の各階層に盛んになっていた背景や指導の具体相も探ってみたい。

加賀藩の「天保の学制修補」と総試業

江戸時代藩校の「武士に対する出席強制の制度化」の全国的動向を『日本教育史資料』をもとに考察した海原徹によれば、「出席強制の制度化」は、大多数が天保年間以降に具体化した。出席強制の方法は千差万別であったが、身分の高い武士や同じ身分内では、相続予定者である嫡子に対して特に出席を促すことが一般的であった。(『サムライ学校の修学強制』『近世の学校と教育』思文閣出版、昭和六三年、六一―一頁参照)

加賀藩の年寄・奥村栄実による天保十年(一八三九)の「学制修補」の内容とその際の教官たちの提案については、拙著「藩校教師の葛藤」(『勉強』時代の幕あけ)平凡社、一九九〇所収)で

説明・検討しているが、ここでも、この時の「学制修補」の内容を簡単に紹介しておきたい。

まず、「人持ち」以下「平士並」以上の嫡子嫡孫は、一五歳から二三歳まで九年間を強制就学とした。儒者の嫡子・嫡孫は例外的に就学を許した。しかし、「平士並」とされる武士には様々な特殊な職種があったが、そのうち「家芸」のある人々の嫡子・嫡孫は入学を禁じられた。この内、御射手、御異風(鉄砲)や医師の嫡子嫡孫も禁じられた。また、新番小頭、三十人頭、坊主頭、御鷹匠小頭以下の伴も禁じられた。優れた藩士の子弟を「新番組御歩(おかち)」とし、出世の道を開いていたが、結局この層が「平士並」とされていたので、その入学を許可したに過ぎないように見える。平士並以上の次、三男や「御歩並」以上の「俊異之者」は「生徒」とする場合がある事も規定しているが、その適用例が知られていないので、実質的には、この時から平士以上の嫡子嫡孫の学校となってしまうことになる。

また、明倫堂における藩士の試業制度は、文政二年(一八一九)にはじまり、天保四年(一八三三)には、試業欠席者は、春は三月一五日、秋は十月三十日に追試を受けねばならなくなった。

「学制修補」がされた天保一三年からは、二十四歳より三十九歳までの一般藩士の「総試業」が始まった。『稿本金沢市史 学事篇第二』にも、「天保一三年以後は総試業なるものがあり、一八歳から二九歳までのものは『生徒』と同じく試業し、人持以下平士並以上役掛を除き、二十九歳より三十九歳にいたるまでは通番三カ年に一回試業した」(二三八頁)とある。

これは、成績の悪いものに対する罰則は示されていなかったが、儒学学習を怠っていた、あるいはそれが不得意な藩士には大変な事件(脅威)であり、この試業をめぐる様々な噂が伝えられていた。

よく知られているのが、豫卿の親友・大嶋稼亭の父大嶋清太の意見書中の言葉で、以下のようなものである。

「惣試業の儀は、諸子一統書を読ませ候との御趣意と奉存候、然処是実に寸益なくして大害を生じ候基と乍恐奉存候、夫を如何と申し候に、其以来惣試業に因りて読書之志に向候者、一人有之義承り不申候。乍然初之年は何も儒家へたより下読、下書等の稽古致候人々も有之候共、次年よりは其様一切無之様に相成候、且便所書・弁当書など、近來世上に悪言申触し候義、以之外に御座候。……」（傍点引用者）

この意見書は『日本教育史資料』編纂時提出した原本またはその写しとみられる県立図書館蔵『旧藩学校沿革調』には「戊申十一月」の記入があり「嘉永元年」とのメモが残されている。嘉永元年十一月のものであることは明らかであり、嘉永年間初期の藩士の儒学学習状況を示すものとして、本研究にとつては極めて興味深い。この大嶋清太の状況認識が正しいかどうかを本史料から部分的に判定できる面がある。すなわち「正しかった」ようである。

なお、武芸についても同様の奨励策がとられていた。天保一一（一八四〇）年七月には門弟中で最も勉勵するもの二人を推薦させ、藩主親臨してその武芸をみ、毎年師範家に門弟の稽古日数を調査して提出させ、特別勉勵のものには、袴地を下賜された。五カ年間経武館の定日八分以上の出席者には身分により、馬袴や白銀を賞与した。（加賀藩では武道は基本的に師範家の道場で学び、月に一、二度の定日のみ経武館で学ぶ方式がとられていた。）年によつては、特別の奨励、昇進や抜擢がなされた。例えば、嘉永元（一八四八）年十一月二十八日には、「天保一一年より弘化四年迄」武芸に励んだ二五・二六人の者に二の丸御殿に招集し、目録が下された。嘉永六年には三三名のものが武芸出精の名目で加増、召出、陪臣からの与力への登用、昇進、金品贈与が行われた。『稿

本金澤市史 学事篇第二』三百六十一・一二頁、『日本教育史資料』『加賀藩史料 幕末篇上巻』八一・八二頁などを参照）

『起止録』の著者（余卿）自身や、その弟子たちが文武の修業に励んだ背景には、当時の加賀藩でこのような奨励策が行われていた事と大いに関係があったと考えられる。

以下では、嘉永二年前後の起止録から武士の身分階層の違いに注目して、当時の加賀藩武士の儒学教育の実態を少しく窺つてみる。ただし、幕末加賀藩武士の漢学学習の全体的把握は、起止録研究のメインテーマの一つの積もりであるが、今回は解説がまだ一部分であるため、初歩的、部分的考察に過ぎないことを断つておかなければならない。

深美家（四千五百石）、篠原家（四千石）……上級武士

少し時代は遡るが、天保一四（一八四三）年九月二三日、豫卿が二十一歳の時の記事に「是日深見（ママ）殿へ初めて行小学素読一枚余授」とある。人持で四千五百石の自身・深美兵庫家の子弟への通い稽古のはじまりである。「堤町後」にその屋敷があった。その後の深美家でははじめの頃の指導記録を書き抜くと、表2のとおりである。

これによると、深美（見）家での初期の生徒は二人だったが、どちらかが休む場合もある。また、学習書目が省略されているのは、初歩の素読指導の段階であ

表2 初期深美家稽古

天保14年閏9・7	八時より深見二人八つ半より原田……	10.23	深見二人
閏9・17	八時より深見一人	11.3	深見一人
10.2	深見二人	11.4	深見二人
10.7	八時に深見二人	11.6	深見一人
10.13	八時に深見二人	11.16	無稽古
10.16	四時に深見一人四つ半に山崎……	12.3	深見二人

（注 深美は起止録には深見と表記されているので、深見のままとした。）

るからであろう。指導時間は半時(約一時間)であったことが分かる。深美家での指導はかなり後まで継続している。弘化二(一八四五)年十一月七日には、「深美素読詩経下三枚授」同十一月二日には「深美釈読論語四章」とあり、この頃には素読が五経にまでまた論語の内容の講義に及んでいる。しかし、翌年の三月二十七日に「深美へ行き釈読五章」の記事を最後に、以後、深美家の稽古に通った記録はなくなる。その理由は、同日夜に正月二十四日の件で「外出差し止め」の処罰を受け、外出ができなくなったためである。外出差し止めは、前述のように一年間以上に及んだ。それが許された後も、再び深美家に通った形跡はない。

人持ちで四千石で西町に屋敷があつた篠原織部家の稽古の場合を同様と調べると、嘉永三(一八五〇)年六月二十六日には、「七つ時より貞観政要下読」の記事があり、翌日には、「……昼後帰湯あみ尋いで孝友堂へ一寸寄り、篠原へ初めて行貞観政要起業、式拾葉余七つ過ぎに帰る」とある。七月二日には「貞観政要読暫午睡……八つ時より篠原へ行貞観政要起業、式拾六葉、跡に文五郎論語質問四五章七つ半に帰る」とある。篠原家のはじめての指導には、かなり早くから入念に準備している。この後、同月二日、二十七日、九月二日、一七日にも篠原で貞観政要(と論語)の指導をしている。しかし、十月二日には豫卿の召し出しの通知が来る。この日から与力として一人前の職業生活に入るが、以後篠原への出張指導の記録は十一月三日を最後になくなる。

ところで、二千五百石の人持組であつた成瀬正居による『成瀬日記』の翻刻が梶井重明氏によって進められ、インターネットに公開されている(<http://naruseniki.web.infoseek.co.jp/>)が、これによると大体同時期に豫卿の師・西坂成庵自身が通い稽古で成瀬正居などを教えている。このように大身の家柄では、儒者や

その弟子たちに通い稽古を頼んでいた事が分かる。(成瀬家の場合、儒学に限らず、弓、鎗、馬術、書道の師匠を個別に依頼していた事が、成瀬日記から分かる。)なお、成瀬日記によると双方の都合(含む病氣)で当日日程変更になる場合も多かったようだ。豫卿の場合も同様だったと思われる。

南 清五郎、明石源太郎ほか……中級武士

嘉永元年一月の大嶋桃年の意見書に「近年に至り、授読の書に拘わらず一年前より別に一、二の篇目きめ置き、その内にて弁書致させ候事に仰せ出され候につき、心がけの人は篇内幾度も熟読いたし、下書き等も致しまかりあり候へば、当日に至り苦もなく書き写し候のみに御座候。心掛け無之人は……右何れも平成授業の月日には一切相成り申さず候。……」(徳田進『近世の学習方法』講談社、四五頁所引)とある。上記三名の人たちは平士であり、総試験の対象者である。従つて、ここに出てくる豫卿の弁書の「点検」や「直し」は、彼らの試験対策の手伝いであつたと考えられる。以下、それぞれの(解明できた場合の)家筋なども少し詳しく検討しておきたい。

組外百八十石・南 清五郎の居宅は、明治三年提出の由緒書では浅野川沿いの備中町である。現在の材木町に含まれる。南源左衛門の嫡子、南 清五郎は、嘉永六年七月二日亡父源左衛門の跡目相続がかない、組外御番頭支配となつた。嘉永二年の頃は、いまだ二三歳の若者であり、まだ「無息(足)」(士分の子弟で未だ藩から知行を受けない者)であつた。南家は、祖父の代まで百五十石の本組与力であつた。父の代に年寄衆席留書御用を長年勤めあげ三十石加増され「組外」へ昇格した。清五郎の下妹は、坂井伊太(夫)の妻、二番目の妹は本組与力・山口七兵衛に嫁いだ。夫が若死にし、文久二年一二月与力・植松平左衛門と再婚し

表3 南清五郎学習歴			参考事項
年月日	記事		
嘉永2.2.4	九時頃南清五郎来、入門、連れて孝友堂へ行く		
2.22	来、小学素読講釈		
2.23	来、小学		
4.4	南清、森守来、小学、論語釈読等		
4.7	九時頃に起、軍章咄、南清来、尋いで又素二人		
4.14	九時頃に起、素二人、南清来、跡三皆算術稽古、昼後皆去		
閏4.3	髪結来、午後四時過ぎに去る。、先是又素（読）二人、南清来、跡三算術稽古		
閏4.23	早川江行、水大（水野大作）と基四番、午後四時に帰る、尋いで南清来、小学素読、釈読、算術、基武番、晩に去		
閏4.24	10時前から南清来、素読、釈読、間三森守来、山元来、跡に南清、山元と基武番、昼に皆去。夜好文圖来、又南清来、吉田文圖と吉常、南清与基武番、余、南清与式番、好文圖と笛式、三曲、午後9時頃に好文圖去、跡三咄、12時頃に皆去、		
5.3	南清来、小学、森守論語四章		
5.12	昼後南清来、弁解下読		
8.3	来、弁解下読老章	5.21	豫卿父死去

明石源太郎は、豫卿とほぼ同年齢で、馬廻・明石久兵衛の嫡子であった。天保九年（一八三八）二百五十石の相続を許された。嘉永六（一八五三）年一月八日割場奉行当分加入、同七年四月一四日定検地奉行となり、慶応二年には経武館督学に加わった事が分かっている。しかし、弁書試業のこともあ

文久四年八月十二日にその息子を入門させている。

た。（図1参照）南清五郎の孝友堂入門は嘉永二年二月四日である。この時二十歳である。すぐ孝友堂へ伴っている。その後の豫卿のところへの通い方は月に三回程度、小学の素読と釈読を受けているが、本格的指導を受けているようには思えない。嘉永二年の学習状況は表3の通りで、八月三日以降は全く学習をしていない。嘉永三年四月一二日には論語に入るが、その後も熱心に通った形跡がない。安政二年九月二十九日に一緒に弓を射ったりしているが、儒学学習の記事はない。二十歳になって小学の素読するのは、儒学学習を怠っていたということであろう。なお、少し後になるが、

るからであろう、豫卿の援助を一時期受けたようだが、嘉永二年の修学状況からみて、すなわち、はじめ弁書の指導を受けようとしたが、儒学の基礎ができていなかったとみえて、蒙求の学習から始めている。二十代後半に達していた明石の少なくともこの時期の儒学の学力は、未だ相当低かったと言わざるをえない。「文」よりは「武」で頭角をあらわしたとみられる。明石源太郎は、修学強制が強まった幕末の加賀藩でも、儒学の習得が必ずしも出世の必要条件ではなかった具体例といえよう。

その他、河内山隼人、主馬や中山権次郎、山脇保三郎が、この年には弁書指導を受けている。河内山隼人、主馬は兄弟である。中山については今は特定出来ないが、山脇は二百石の平士で当時十七歳である。中山も平士身分であることはまず間違いない。

中山、山脇は二人で十月二十九日に訪問し、翌日三十日から連続して詩経と礼記の素読、論語と小学の釈読指導をしたり質問を受け、その後山脇のみが一人で質問に一度来るがそれで終わっている。これは三日間連続の短期集中指導の形をとっている。

これら、平士身分の中級武士は、いまだ十分に検証できているわけではないが、総試業に対処するための指導を受けていたと思われる。

山本伝太郎、森嶋（十太郎）守人、三田村半助、水野金太郎、遠田良平……与力の子弟たち

表4 明石源太郎		
嘉永2.4.18	明石源へ行、弁書老、式章直し、夜六ツ過三帰	
4.22	七ツ前より明石江行、弁書直し等	
4.28	七ツ時より明石江行、弁書点見、是日蕎麦振舞	
閏4.4	明石へ行、弁書点検	
閏4.9	明石へ行、論語起業序半枚質問	
8.27	明石源太郎来蒙求質問起業	
9.2	来、蒙求	
9.12	来、蒙求質問	

残されている由緒書きによると、嘉永七年七月山本和多次の嫡子、山本伝太郎は、百六十石を相続した。（図1参照）嘉永二年には一四歳であった。弘化四年五月一二日に豫卿に入門している山本元太郎がこの伝（源）太郎の幼名である可能性が高いが断定はできない。幼名の可能性が高い理由は、父、山本和多次が死去（嘉永二年十二月病死）の前後に、頻繁に豫卿を訪れていた「山元」の語が登場しなくなるからである。

山本伝太郎の入門は、「孟子本文始より武章釈読（ときよみ）」とあり、少し進んだ段階からの入門である。しかし、同月二七日には早くも「山源（引用者註 このように元を源とするようなあて字は他にも多い）孟子跡に基四番」とあり、初めから漢学習得だけの関係ではなくなっている。六月七日には「夜山元、山政、生佐来笛稽古数曲五つ半過ぎに去る」とある。このような漢学習得以外の交流が後になるほど多いのが、豫卿と山本元太郎との関係の特徴である。嘉永二年の日記にも彼の名は多数登場するが、ほとんどが囲碁や謡にかかわることである。

森嶋守人は、早川主殿与力・百石の森嶋彦左衛門の嫡子である。文久元年三月家督相続を許された。嘉永二年には一九歳であった。森嶋は弘化四年四月二七日に一六歳で豫卿に入門した。同じ年の七月二六日同じ与力町の住人・水野金太郎が九歳で、また七月二八日遠田良平が十歳で入門したのに比べると、極めて年長である。森嶋ははじめ「森十」と略称されるが、嘉永元年五月二七日から「森守」と略される。恐らく十太郎は幼名、守人は元服後の名であろう。小学釋読から始めている。弘化四年五月二六日には素読の指導を豫卿に代わって行っているし、一定の水準に達していたようだ。かなり頻繁に教えを受け、嘉永二年には論語の釈読に進み、多く指導を受けているものの進度は余り捗っていない。また、

表5 森嶋十太郎（森十、のち森守）

弘化4.	4.24	森嶋来、咄
	4.27	森嶋十太郎入門、小学起業訳読序全 16歳
	4.28	豊虎、森十来十小学題辞半分釈読
	4.29	来、・・十小学題辞跡全
	5. 3	来、・・四つ半に森十去る
	6. 7	小学本文老章釈読
	6. 8	森十来小学済みて・・・
	6. 9	来小学
	6.10	森十来起き小学
	6.11	来小学
	6.12	来小学
	6.14	来小学
	6.16	来小学
	6.17	来小学
	6.18	小学
	6.19	小学
	6.20	小学
	6.21	小学
	6.22	小学
	6.23	小学
	6.24	来小学、跡に謡舟弁慶
	6.25	来小学、尋いで豊虎来咄謡鉄輪一番聞き・・
	6.26	素論一人、森十授森十小学
(中略)		
嘉永元	12. 3	来小学跡に白楽天加茂物狂武番謡晩に去る
	12. 5	小学跡に巻絹一番くり・・・
	12.13	来小学訳読卒業跡に巻絹老番謡實盛クリ口移し。晩に去る。
嘉永2.	1.24	来、謡、殺生石二三郎、実盛守人武番、昼後去
	2.10	森守論語釈読老章起業、跡に谷行老番クリ、七時に去
	2.11	論語三章
	2.16	論語四章
	2.17	論語三章
	2.21	論語武章
	2.22	論語三章
		(以下略)

豫卿が味噌蔵町への転居した後、は足が遠のいてしまうようだ。しかし、その後も時々豫卿を訪れている。（安政元年十月一九日、文久二年七月一日、十二月二十五日など）

本組与力・三田村佐七郎の長男で嫡子の三田村半助は、弘化四年六月七日に豫卿に入門した。その日は大学序の素読をした。それからしばらくは「大学注素読」を重ねたが、七月頃には記録がなくなる。（日記では、素読指導の場合大体素〇人とのみ書き、人名を明記しないのがほとんどで、判別できない）、弘化四年八月二九日には「中庸素読」をしているが、嘉永元年頃には、記録がな

く（この時期豫卿は「算術稽古」をする場面が多く登場する）、同二年にはまた登場するが、素読と同時に算術や謡のみをする場合が多くなる。これは、この嘉永二年の翻刻文でも確認できる。しかし、嘉永三年三月一四、二三、二四日には孟子釈読を集中的に指導してもらっている。なお、三田村の居宅は豫卿の斜め向かいであり、そのためか豫卿の方から訪ねる場合も多い。

三田村半助弟の駒次郎は、次男で武芸出精のため袴地拝領し、文久三年五月知行百石の本多図書与力に召し出され、元治元年六月には公事場付き御用加人となった。則ち、豫卿の同僚となった。このように、武家の二、三男にとつて武芸で頭角を表すことも、出世の重要な手段であつたことは前にも触れた。

水野金太郎（水野金大夫の子）、遠田良平（遠田長平の子）の入門は、それぞれ弘化四年七月二六日、同月二八日である。それぞれ九歳と十歳と書かれている。兩人とも「大学初より素読」である。この頃の素読の人数は、この二人が加わり毎日三人から四人である。前にもふれたが、素読指導の場合、単にその日の人数しか書かれていないので、それ以上の分析は現状では難しい。しかし、小立野与力町の何人かの子弟の初歩の漢学入門指導も引き受けていたことは、この項の事例だけでも明らかである。

豊島^{てしま}（虎三郎、略称「豊虎」……もつとも親炙した弟子

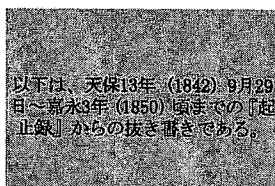
豫卿にもつとも長く学んだ豊島虎三郎（幼名・虎之助）の家系は、今のところよくわからない。ともあれ「豊虎」の記事は、天保一三年九月二八日の記事が初出である。当時二十歳の豫卿は、六時に白山社の参詣から帰り、素読を豊虎に「四十枚計」五時まで授けたとある。その後、同年十月四日にやはり「素読六十六枚計」とある。（表七参照）何の書であるかは書かれていないが、こ

の二回で素読は大体できることを確認したと思われる。この後、断続的に豫卿のところに通い続ける。はじめ小学訳読、次に孟子訳読、時に詩の添削も受けている。（たとえば、天保一四年一月二八日）豊島虎三郎は、素読の段階は一応終わっていると判断されたようで、小学の「訳読」からはじめていたのである。小学↓孟子と進むのは一般的学習順序と言えるが、その途中で蒙求を丁寧によりはじめる。蒙求は、漢学の入門書として広く用いられてきたが、「町学者が経史詩文の間に、蒙求を挟んで教授」するのは、「堅い一方で受講者が倦みやすいから、興味を以て聞かれる多様性を持った内容の蒙求で、漢学へ関心を繋ぐ一方法にしたのであろう。」（早川光三郎『蒙求 上』解説、新釈漢文体系 五八、七頁）という記述もあるが、小学を「卒業」せず、孝経を少しの期間やったあと、また蒙求に入り、これに長時間かけたのは、豊虎が経書学習に向いていなかった事を推測させる。

その後は、十八史略↓純正蒙求（元・胡炳文撰、文化元年幕府の官板が出版）↓国史略の順に指導している。国史略は一八二六年（文政九）岩垣東園による編年体の国史の歴史書であり、教科書的に広く使われたと言われる。中国の十八史略にならって評論、人物伝、挿話などに分類してある。全五巻。

これらのテキスト選択は、オーソドックスな経書学習の路線から明らかに外れ、史書学習に傾斜している。なお、『純正蒙求』の指導する頃（弘化三年春頃）から、課業後、二人で碁を打つことが多くなる。ここに翻刻した嘉永二年になると、豫卿が父の死去、葬儀、病氣などと指導を受ける時間的条件が乏しかったこともあろうが、ほとんど漢籍学習をしていない。嘉永三、四年にも時々訪れるものの相談相手としての役割が大きかったようである。漢籍学習の片鱗さえも記録に残っていない。その後、豊嶋虎之助は嘉永五年九月一三日算用者・山田市兵衛に養子となり、姓も変化

表6 豊嶋（てしま）虎三郎の学習歴



以下は、天保13年（1842）9月29日～嘉永3年（1850）頃までの『起止録』からの抜き書きである。

天保13.9.28	素読40枚計
10.4	素読66枚計
10.15	小学釈読老章
10.18	小学下読武章
10.19	十八史略武枚
10.21	小学三章、十八史略武枚
10.24	十八史略一枚
10.25	十八史略二枚
10.27	小学五節
11.1	十八史略五枚訳読
11.5	小学一章
11.16	十八史略一枚余訳読

天保14.2.2	小学一章
2.4	小学一章
2.9	小学
3.17	小学二節
3.25	小学三節
3.31	小学三四節
4.2	詩一詩
5.28	孟子一章余訳読
6.8	孟子一章訳読論語下読
6.13	孟子一章訳読
6.28	孟子二節訳読
8.3	孟子二節
9.8	孟子一節
9.18	孟子二節
9.28	孟子二章訳読
閏9.8	孟子二章
閏9.13	孟子一章
10.3	孟子一章
10.8	詩二首直し孟子一章
10.18	来・
10.19	蒙求武枚半
10.23	蒙求老枚半
10.26	蒙求武枚半
10.27	蒙求武枚半
10.29	蒙求老枚半
11.3	蒙求三枚
11.5	蒙求二枚
11.6	蒙求二枚半
11.7	蒙求老枚半詩を直し
11.9	蒙求武枚
11.11	蒙求武枚
11.17	蒙求老枚半
11.19	蒙求武枚半
11.2	蒙求武枚
11.21	蒙求武枚半
11.29	蒙求参枚半
12.1	蒙求参枚
12.28	来咄

天保15(12月～弘化4) 2.11	小学二、三枚
1.3.6	詩二首直小学三節
3.11	小学二、三枚
4.28	小学六枚
4.29	小学六枚
4.3	小学六枚
5.1	小学六枚半
5.5	小学二枚半
5.11	六枚
5.12	六枚
5.13	小学二枚
5.14	小学三枚
5.15	小学六枚
5.18	小学三枚
5.19	小学二枚半
5.24	小学二枚半
6.4	小学三枚
6.10	小学三枚
6.28	小学二枚余
6.29	小学三枚
6.30	小学二枚半
7.6	小学二枚半
7.7	小学三枚半
7.9	小学三枚半
7.24	小学武枚
7.25	小学老枚半
7.26	小学武枚半
8.2	小学武章弁書一編清書
8.6	孝経起業三枚
8.10	孝経四枚半質問
8.14	孝経四枚
8.15	孝経三枚
8.18	孝経五枚
8.22	孝経七枚
8.26	孝経二枚半
8.28	孝経二枚半卒業
8.31	蒙求起業
9.4	蒙求二枚
9.6	蒙求二枚
9.10	蒙求三枚
9.26	蒙求二枚半
9.29	蒙求二枚半
10.2	蒙求二枚
10.5	蒙求二枚余
10.9	蒙求二枚半
10.11	蒙求二枚半
11.3	蒙求三枚五半
11.5	蒙求二枚五半
11.6	蒙求二枚半
11.7	蒙求一枚半
11.9	蒙求二枚
11.11	蒙求二枚
11.17	蒙求一枚半
11.19	蒙求二枚半
11.20	蒙求二枚
11.25	蒙求二枚
11.29	蒙求三枚半
12.1	蒙求三枚
12.28	来、咄

し山田虎三郎となるが、その師弟関係は後まで継続し、種々の人生相談に応じたことが想像される。表6にその学習歴を詳細に抽出してみたが、儒学学習も多く、の学習者にとって一直線ではなく、学習のプロセスで色々な分岐があったことを、彼の場合が示して

いるように思う。ただし、その学習歴の詳細な分析は、他の弟子の学習歴や、使ったテキストでの進度の確認などの作業も必要であり、今回は大まかな見通しを示してみたに過ぎない。

弘化 2.11.21	歌かるた張直し
1.22	蒙求武枚
1.23	蒙求武枚
1.23	蒙求武枚
1.26	蒙求武枚
1.27	蒙求老枚
1.28	蒙求武枚書写蒙求かるた全しあげ
1.29	蒙求参枚半より蒙求かるた取
2.16	蒙求老枚余
2.17	蒙求老枚半
2.18	蒙求武枚
2.19	蒙求老枚半
2.21	蒙求四枚
2.23	蒙求二枚
2.24	蒙求二枚
2.26	蒙求老枚
2.29	蒙求武枚
2.3	蒙求武枚
3.3	蒙求武枚詩一首直し
4.15	咄
4.18	蒙求三枚
4.19	蒙求三枚
4.21	蒙求三枚
4.22	蒙求武枚
4.23	蒙求武枚
4.24	蒙求武枚半
4.26	蒙求四枚
4.27	蒙求武枚半
4.29	蒙求三枚
4.3	蒙求三枚
5.3	蒙求武枚半
5.6	蒙求武枚半
5.7	蒙求武枚
5.8	蒙求武枚
5.1	蒙求三枚・・九つ前に豊虎へ寄咄・・七時より豊虎来、詩会一首七律
5.11	蒙求三枚
5.12	蒙求武枚
5.13	蒙求武枚
5.14	蒙求四枚
5.15	蒙求老枚
5.16	蒙求武枚半
5.17	蒙求武枚半
5.18	蒙求参枚半
5.19	蒙求武枚
5.2	蒙求武枚半
5.21	蒙求武枚
5.22	蒙求武枚半
5.23	蒙求老枚
5.24	蒙求三枚
5.25	蒙求武枚半
5.26	蒙求武枚半
5.27	蒙求武枚五半
5.28	蒙求武枚五半
5.29	蒙求武枚
5.3	蒙求武枚半
6.2	蒙求武枚五半
6.3	蒙求武枚五半
6.4	蒙求武枚卒業

(次ページ左表に続く)

弘化 3.1.17	豊嶋へ悔やみに行き
3.11	豊虎来暫咄
3.17	孝友堂へ入門紹介す
3.22	純正蒙求十枚
4.6	史記初より五枚読
4.18	純正蒙求質問四枚、史記素読3枚
4.24	純正蒙求質問三四枚質問
4.27	来咄、晩に去
4.28	咄、基二番
5.1	来・咄
5.2	基二番
5.16	暫咄
5.17	咄
5.18	咄
5.21	暫咄
5.25	基五番
閏5.10	純正蒙求八枚質問跡に後？番
閏5.16	来暫咄
閏5.18	一寸来・・又来純正蒙求三枚
閏5.26	純正蒙求五枚余
閏5.27	四時過ぎより昼まで史記質問
閏5.29	純正蒙求五枚余
6.12	暫来
6.23	純正蒙求八枚卒業
7.5	咄、基二番
8.2	基四番
8.21	咄
8.22	国語質問起業
8.26	豊虎来尋て坂井先生来基數十番咄など
9.3	国語十枚質問
11.22	豊嶋弥来暫咄

弘化2年の続き(左下より)	
7.8	十八史略五枚
7.9	十八史略四枚
7.11	十八史略五枚
7.18	十八史略三枚・・昼又・・十八史略三枚
7.19	十八史略三枚
7.2	十八史略三枚
7.21	十八史略三枚基二番
7.22	十八史略五枚
7.23	十八史略三枚
7.24	十八史略三枚半
7.26	十八史略五枚
7.28	十八史略五枚
7.3	十八史略五枚
8.2	十八史略三枚
8.3	十八史略三枚
8.4	十八史略五枚
8.6	十八史略六枚、跡に四時より基三番
8.8	十八史略三枚
8.1	十八史略四枚
8.11	十八史略四枚
8.14	十八史略五枚
8.16	十八史略四枚
8.18	十八史略三枚半
8.19	十八史略三枚

(次ページ中表に続く)

弘化 4.2.16	基十番計
2.16	基十番計
2.19	基六番
2.22	基七、八番
2.28	来、帰
2.29	基老番
3.16	岸熊来、基四番中に豊虎来岸熊と基老番
3.19	豊虎来に付き帰り基二番
3.21	豊虎来基老番・・豊虎連れて早川へ行き基二番
3.25	来る
3.26	基二番
4.29	国史略起業
5.3	来
5.4	豊嶋へ行き豊嶋にて基二番
5.16	来
5.2	国史略と論語
5.25	来・咄語鉄輪一番聞き帰る
5.26	国史略及論語跡に語通盛
5.29	来
6.8	国史略六枚読む
6.10	国史略六葉読む 他の門生とどじょう汁
6.12	国史略7葉、謡
6.13	笛稽古
6.14	国史略六葉
6.16	国史略
6.17	国史略4葉
6.18	基老番
6.22	国史略四枚
6.25	国史略四枚
6.26	謡2番
6.28	国史略八葉、笛稽古
7.13	基二番
7.21	国史略四葉
7.26	来る
7.28	国史略三葉
7.29	笛稽古
7.30	国史略二葉
8.1	学友たちと車山へ行く。笛二曲など
8.5	笛三曲、基四五曲
8.9	国史略五葉、数人と鶴間谷散策
8.10	国史略五葉、基二番
8.12	国史略十葉質問
8.14	国史略三の首五葉
8.22	笛数曲賦し
8.28	行き、基、謡
8.29	国史略六葉
9.1	国史略六葉
9.6	基三番
9.22	山元と行き基諸六番
9.29	手伝国史略質問
10.18	国史略跡に咄
10.26	国史略、跡に謡クリ
11.15	来有
11.19	祝儀に来
11.22	国史略五葉
12.28	基二番

(次ページ右表に続く)

弘化2 6.5	蒙求題温習誦読	弘化2 8.2	十八史略四枚半	弘化 5.2.2	国史略
6.6	蒙求題温習誦読	8.21	十八史略・枚半	嘉永元 3.24	行き鶴間溪・へ暫遊行
6.8	十八史略起業七枚	8.22	十八史略壹枚半	3.26	国史略
6.9	十八史略六枚	8.24	十八史略三枚半	4.8	基四番
6.1	十八史略七枚	8.25	豊虎来今基来基打七前より井多 来十八史略七八枚	6.19	豊虎・森守来一行物書き
6.11	十八史略五枚	8.27	十八史略三枚	7.3	国史略質問
6.12	十八史略六枚	8.28	十八史略三枚	7.8	基二番
6.14	十八史略四枚	8.29	十八史略三枚跡に基三番	7.1	孝友堂年々出席帳面清書
6.16	十八史略八枚	9.1	十八史略四枚跡に基一番	7.11	孝友堂年々出席帳清帳
6.17	十八史略四枚	9.2	十八史略四枚跡に基二番	7.12	孝友堂年々出席帳清帳
6.18	十八史略三枚	9.3	十八史略四枚基二番	7.23	豊虎・森守・舟木・藤本来誦・・・
6.19	十八史略五枚	9.4	十八史略三枚半	8.19	豊虎・森守来誦
6.21	十八史略六枚	9.7	十八史略三枚半跡に基経打ち	8.28	咄
6.22	十八史略六枚	9.8	十八史略貳枚	9.2	国史略質問卒業
6.24	十八史略七枚	9.9	十八史略三枚、跡に基貳番	10.4	基数局
6.25	十八史略五枚	9.1	十八史略三枚		
7.3	十八史略六枚	9.11	十八史略三枚		
7.5	十八史略五枚半	9.12	十八史略貳枚		
7.6	十八史略五枚跡に基	9.14	十八史略三枚		
		9.15	十八史略四枚跡に基三番		

嘉永2 3.13	来、誦
3.29	来、暫咄
4.11	来、晩皆去
4.15	来、晩二皆去
閏4.24	来、舟木茂太郎来、兩人山元与基貳番宛
5.3	来、咄、基貳番
5.15	来、晩に去
5.18	此夜豊虎、山元、森守半夜伽
5.22～23	来、23朝帰る
6.23	基貳番
7.6	来、暫咄去
7.12	来咄
7.16	来、終日頼置由緒帳老冊調もらう
7.19	来、昨日由緒帳調替可指図旨申来
7.29	咄、由緒帳扣老冊頼遣す
8.16	来、暫咄去
8.21	来又暫咄
9.14	来暫咄
10.19	来咄、晩二去
11.9	来咄、晩二去
11.13	来咄
11.14	昼後迄豊虎之詩二首直シ
11.18	昼後豊虎来咄、算術等
11.21	来、暫咄去

嘉永3 1.17	豊虎・森守来同歌かるたなど
5.8	咄
5.9	咄
5.14	豊虎へ行き暫咄
6.2	咄
7.14	咄
8.12	咄
11.21	咄
嘉永4 10.23	来、去る
嘉永5 9.13	算用者・山田市兵衛の養子と なる

梅村環と浦野庄兵衛・・・陪臣子弟の弟子

梅村 環（略称「梅環」）は、六千五百石の人持ち、寺西要人家来給人で六十石を給された梅村十太夫嫡子であり、浦野庄兵衛はその弟である。要するに、この二人は陪臣の子弟である。梅村環の場合、幸いに由緒書きが残っているので、その詳細な履歴が分かる。

梅村環の年齢は、ここに翻刻国した嘉永二年では二二歳、当時二七歳だった豫卿とは五つ違いであった。天保四月三日寺西家の御少将組に召し出され、同一三年四月には先名の小十郎を「環」と名乗るように主人から命じられ、改名した。嘉永二年閏四月二六日には、「式台取次役」となった。安政五年正月父が隠居して、家督を相続し、父の通称十大夫を名乗った。医学者としてのちに著名となる津田淳三は、母方の従兄弟である。

梅村 環が豫卿のところを経書を習いに来たのは、弘化元年の秋で孝友堂で学んでいたが、豫卿の方から指導を誘った趣がある。（表7の学習歴のはじめ参照）。彼の場合、質問が中心であり、主体的に学習するタイプであったと推測出来る。釈読（十八史略）や対読（資治通鑑）の場合も進度が速い。教え甲斐のあった弟子であつたろう。

のちに浦野家の養子になり、梅村家の三男でのち三十石をもらった浦野庄兵衛は、弘化三年十月十九日に入門したようで、教わる機会も多くはなく、文久二年（一八六二）閏八月に亡くなつてしまったが、実弟（四男）がその末期養子となった事がその由緒書から分かる。これに拠れば、この弟は文久二年（一八六二）一二月明倫堂において五経卒業で「御書物拝領」の榮譽を受けている。この弟は、勤勉な兄二人の指導や影響を強く受けていたと推測される。

表7 陪臣の子、梅村環 浦野庄兵衛兄弟略学習歴

	梅村環（梅環）	浦野庄兵衛（浦庄）
弘化	梅環、士秀と長谷山へ	
1. 9. 28	遊行	
10. 11	梅環に会い連れて帰り 論語下読	
10. 16	来論語下読	
10. 19	八時より孝友堂論語丙 席輪講永山弁解梅村環 奥野玄聰聞晩に帰る	
10. 21	来論語国史略など質問 咄	
10. 30	八時よりき晩まで咄	
11. 12	来論孟など質問	
12. 11	梅環、辻得と小森へゆく	
12. 12	来咄質問	
12. 22	来点作（添削）	
弘化	来書写	
2. 1. 22		
2. 6	行き弁書下読	
2. 16	小学	
5. 4	来咄8つ半より詩添削	
9. 10	論語質問16枚	
10. 15	来咄など	
弘化	来咄	
3. 2. 5		
2. 6	行き弁解下読	

(右表へ続く)

2. 29	来咄	
4. 20	質問など	
閏5. 3	来咄詩二首直し	
閏5. 8	来大学質問及び蒙求10 枚昼去る	
閏5. 19	蒙求三枚質問	
閏5. 23	蒙求八枚質問	
7. 23	来長咄	
9. 19	来咄十八史略質問	
9. 26	来咄十八史略十枚余質 問	
10. 6	来咄新書読む	
10. 19		始めて来る
11. 7	来咄十八史略二十五葉 質問	
11. 18	八つ前より晩迄三王外 記朱書をやとう	
11. 21		来蒙求始めより 釈読二枚半
11. 24		来蒙求三枚
11. 28		来蒙求三枚
12. 2		来蒙求三枚
12. 17	来咄	
弘化	十八史略十葉	
4. 2. 4		
2. 9		蒙求2枚とき読 み
2. 12	十八史略十六葉後質問	蒙求3枚釈読
2. 13		蒙求3枚

(次頁左表へ続く)

2.18	十八史略二十葉素読	
2.22	豊虎、浦庄来蒙求3枚十八史略	
2.27		蒙求2枚半
2.28	十八史略三十葉秋読	
2.29	十八史略前日の三十葉質問	
3.5		蒙求とき読み3枚
3.20	十八史略二十五葉	
3.27		
4.21	十八史略十葉	
4.22	十八史略二十三葉	
4.24	十八史略十九葉	
4.27	十八史略十六葉卒業	
(中略)		
嘉永 2.4.25	七ツ時より見廻二行	
閏4.4	来、史記質問、七ツ半に去	
閏4.12	来るので帰り、史記質問、七ツ過に去	
9.18	八ツ半過來、晩ニ列松、皆去	
10.18	来咄、晩ニ去	
10.22	八ツ過來咄、晩ニ去	
10.28	四ツ半来咄	
11.6	七ツ前又三十詩清書、間に来、暫咄去	
11.13		昼後豊虎来咄、浦野庄兵衛来、去

(右表へ続く)

11.18	来咄	
11.29	一寸寄	
12.16	四ツ半繼来咄、昼後九ツ半過に去	
12.19	夜来、咄、四ツ半過に去	
12.29	行咄、夜六ツ半過に帰	
嘉永 3.1.8	来咄	
1.14	来咄昼後去る。	
1.19		来、劉向新書質問晩に去る
1.24		来、新書質問晩に去る。
2.12		来、新書質問晩に去る。
2.20	暫来去	
2.26	通鑑東漢光武紀より三十三葉対読	
3.3	通鑑三十一葉読む	
3.4	通鑑二十八葉	
3.14	通鑑二十八葉	
3.15	通鑑二十八葉	
3.18	通鑑三十九葉	
3.19	通鑑三十二葉	
3.20	通鑑三十葉	
	(中略)	
安政 2.6.29	来、中庸四、五節弁解聞	
8.4	詩経素読	
文久 2.閏8.3		死去

永山平太・・・年上の競争者

永山平太は文化一二年（一八一五）の生まれ。文政五年（一八二二）生まれの豫卿より七歳年長である。西坂成庵の学統から育ったものの内で、明治期の金澤では最も活躍し、知られた人物の一人と言えよう。『金沢市教育史稿』の学芸人物誌でも多くの字数で解説している。従来も微禄の下級武士（実父は定番御徒・岸平馬、足軽永山市次郎の養子となる。）からその能力で出世した金沢の代表的人物と評価されていた。文政一二年七月に聞番組足輕に「切り米二十俵」で召し抱えられた。安政三年には明倫堂「欽定四経考異御用」のため三五俵で定番御徒並に召し抱えられた。ここでは、従来全く知られていなかった『起止録』からわかる豫卿との交流の一端を紹介してみたい。

『金沢市教育史稿』などでは、永山の数年の江戸遊学は天保十二年と書かれている。これは本人の墓の碑文が根拠である。しかし、養父・岸秀実自筆の『亥軒履歴』（近世資料館蔵）には江戸遊学は天保五年とある。中村家に残された天保一三年の孝友堂「授業出席簿」には「会質」一四五席として「定番御徒吉之丞二男 永山熊之助」の名がある。「会質」とは会説や質問のことらしく、これらを百席以上出席しているのは最上級生のみであるが、天保十二年から数年の江戸遊学では矛盾するので、永山の江戸遊学は天保五年ということであろう。

『金沢市教育史稿』の「学芸人物誌」では、「西坂衷（成庵）、大嶋桃年に就き業を肄う」と書かれており、碑文などの伝記的記述も大同小異であるが、ここでは、二人で『蒙求』の学習会をやった事をとりあげたい。

起止録における永山の初出は、天保一三年一二月一八日に「永山へ行、詩二首」とある。天保一四年四月一日には永山が訪ねてきている。初学の入門書をわざわざ選んだ理由は分からないが、

弘化元年一月九日には、「夜永山来、蒙求三十三枚」とある。同二年一月一七日「永山へ行き詩」とあり、同二四日「永山来蒙求十七枚卒業」とあり、翌日には「永山へ行小学起業二十三枚とある。」猛スピードで互いの学力を競ったのではなからうか。豫卿が先輩の永山の自宅にゆく場合も多かった。小学はその後の記録がないので、始めてはみたもののお互いに自分たちのレベルでは意味がないと合意して取りやめたのかも知れない。

四 幕末加賀の儒学学習の一面

ここでは、『起止録』の嘉永二年の記述の考察を中心に、天保十年「天保学制修補」以後の加賀藩武士の儒学学習実態の初歩的考察を行った。通称を使わず号で呼び合うことが一般化し、号はいくつも持つ場合が多く、元服を期に改名する武士社会では、日記から人物を特定するのが極めて難しい。この事が主たる障害となり詳細な日記を前にしても、分析がなかなか進まないという事になる。しかし、本稿の考察の範囲内でも、加賀藩の幕末武士社会の特質が浮かび出てくる部分がある。儒学学習も始める人は多いものの、蘊奥を極めようとする人物は僅かであり、学習を進めながら自己の適性を自覚してゆくように思われる。また、ある程度年令が進むと、謡曲や囲碁の

表8 永山平太と豫卿の交流のひとこま

天保 13. 12. 1 8	永山へ行き詩2首	弘化1. 10. 23	永山来居周易葬儀下読み
14. 4. 1	夜孝友堂行咄、永山平八来四時帰	2. 1. 17	永山へ行き詩1首
弘化 1. 1. 9	夜永山来蒙求33枚	2. 13	永山へ行き詩2首
1. 17	永山へ行き詩	7. 12	永山来将棋、碁3番
1. 2. 3	永山来蒙求18枚	7. 25	石崖来咄将棋碁笛など
2. 5	永山に行蒙求20枚		
2. 7	永山来蒙求13枚		
2. 11	永山来蒙求27枚		
2. 22	永山来蒙求17枚		
2. 24	永山来蒙求17枚卒業		
2. 25	永山へ行小学起業23枚		
	(中略)		

趣味に流れる傾向が顕著に出てくる。弘化元年京都、江戸へ遊学し、安政三年八月「帰国」した勤王の志士・豊嶋毅の「壬戌歳建白草藁」（文久二年 一八六二、金沢市立玉川図書館、近世資料館所蔵）では、「武士の遊芸月日惰弱之事」が普及し、それを禁じることが「士風振起」に一番重要であると論じている。

「総て諸士たる者、一四五歳より四拾余歳に至り候迄文学武術に精を励まし閑暇無之訳に御座候処、乍恐此頃謡乱舞又は茶式等の遊惰之芸に耽く。子弟謡を知らざれば恥敷思候得共、文武に熟せずして恥とせず。……」

豊嶋は囲碁の弊害には、言及していないが、囲碁の武士社会への普及の弊害もかなりのものであったことは、『起止録』から分かれると言えよう。

終わりに

本稿では、嘉永二年前後の豫卿の身辺の変化と個人的教育活動を中心に探ってみた。しかし、豫卿の前半生を特徴づける私塾・孝友堂をめぐる学習活動については、その概要しか言及できなかった。それは、この時期以前の翻刻が進んだ時のこれからの課題として残っている。

幕末の加賀藩の文化環境について起止録によって探つてゆくと、現代にも通ずる競争社会的側面と、現代とは全く異なる身分社会的側面を感じとれる。ともあれ、四五百石の大身から最下層身分の武士子弟や町人の儒学指導も積極的に行ってきた豫卿は、能力や意欲が学習者の身分や地位とは関係無いこと、あるいは身分・地位と反比例することが多いことを日々実感させられたであろう。そのような実感が人々の間に広まり深まっていた事が、明治維新による新しい社会への期待を呼んだといえるかも知れない。

しかし、これもあくまで解説者の仮説的推測に過ぎない。豫卿

が儒学学習で身につけた儒学の「孝」の徳目を信じていた形跡は、この年（嘉永二年）の父の死去に際しての忌中の行動にも現れている（四頁参照）。

ただし、豫卿の場合も謡や囲碁に割く時間がこの嘉永二年頃から増えてくる。豊虎など弟子にも囲碁、謡の相手をさせる事も多くなっている。この事は、閉塞社会の中で、人は制度として許された娯楽に走りがちであることを示しているとも解される。これは表面的には豊かさが格段に進んだ今日の日本人の行動にも似た所があるとも考えられる。

豫卿は何をどう考え、問題にしていたのか。日々の行動の詳細なメモ集としての性格が強いこの日記からどういう幕末のイメージが浮かび上がるのか。それはまだ多くが未知の領域である。

ともあれ、当時の加賀藩下級武士たちの日々の行動が詳細に描かれた『起止録』を世に紹介する事自体に意味がある。これからも翻刻作業を続ける中で、困難な人物特定作業もさらに進め、当時の金沢城下の人々がどのように生活していたかを具体的に明らかにしてゆきたい。我々は、今後も『金沢大学文化財学研究 10』（金沢大学埋蔵文化センター紀要）以降を中心に、継続的にこの日記の背景や史実を解明してゆく予定である。

〈参考…西暦・和暦・著者年齢〉

西暦	年号	著者年齢
1860	万延 1	38
1861	文久 2	39
1862		40
1863		41
1864	元治 1	42
1865	慶応 2	43
1866		44
1867		45
1868	明治 1	46
1869		47

西暦	年号	著者年齢
1849	嘉永 2	27
1850		28
1851		29
1852		30
1853		31
1854		32
1855	安政 2	33
1856		34
1857		35
1858		36
1859		37

西暦	年号	著者年齢
1838	天保 9	16
1839		17
1840		18
1841		19
1842		20
1843		21
1844	弘化 1	22
1845		23
1846		24
1847		25
1848	嘉永 1	26

図1 中村豫卿祖母の姻戚

